学界時評

中古

山本登朗

中古文学会は、平成十八年十月に創設四十周年を迎え、中京大学を会場に記念大会が催された。第一日目には秋山虔の記念講演とシンポジウムが行われたが、その内容は『中古文学』誌の次号に掲載される予定である。当日にはまた「学会創設四十周年記念中古文学会賞」の贈呈式も行われた。受賞したのは上原作和「揺し按ずる暇も心あわたたしければ」、高兵兵「菅原道真の〈贈答詩〉をめぐって」、坂本信道「さすらふ官人たちの系譜」、田島智子「拾遺集の配列と屏風歌」、眞野道子「定家の源氏注釈における万葉歌」の五篇（『中古文学』78　12月に掲載）。それぞれの内容については論議もあろうが、学界の現状を象徴するかのように対象も方法もさまざまな佳論がそろったことをまずは喜び、受賞者の研究の今後のさらなる発展を祈りたい。

記念大会の閉会の挨拶の中で、学会代表委員の神田龍身は、「東と西」、つまりは東日本と西日本の研究の間が「想像以上に断絶」していることを指摘したが、『中古文学』（78）の編集後記ではさらに「異質なるものの共存は歓迎すべきですが、研究の言葉が交換し合えないのは憂慮すべき事態です」とも記している。研究の国際化、学際化が進む中で、国内の学界内部に断絶があって、いわば共通の言語、共通の土壌を十分に持ち得ていないとすれば、それはたしかに座視できない重要な問題である。

土方洋一「物語作中歌の位相」（『国際学術シンポジウム・源氏物語と和歌世界』青山学院大学日本文学科、新典社　9月）は、土方が『源氏物語のテクスト生成論』（笠間書院　12年6月）で問題にした、引用の形式をとらずに語られるいわゆる「画賛的和歌」についての新たな角度からの再論だが、土方のこの見解は同じ『源氏物語と和歌世界』所収の藤原克己「『袖ふれし人』は薫か匂宮か」、高田祐彦「饗宴の楽しみ」でも取り上げられ、また「源氏物語のことばへ」を特集した『文学』（9月）冒頭の座談会でも問題にされている。

話題を呼びつつある土方のこの見解は、土方自身が記しているとおり、近世の俳文や日本の雅文全体にまで及ぶ重要な問題として興味深いが、実はこの問題は、井出至「和歌散文連接形式の変遷」（『文学史研究』昭和31年12月、『遊文録・国語史篇一』和泉書院　7年3月）によって、いささか違った角度からではあるが、早くに指摘されている。山本登朗「伊勢物語における散文と和歌」（『説話論集』9　11年8月、『伊勢物語論』笠間書院　13年5月）は、その井出の論をふまえたものだが、結果的に土方の論と交錯するところも少なくない。山本の論は、平成3年10月の和歌文学会大会での口頭発表にもとづくが、それを文章化する際に山本は、すでに『むらさき』33（8年1月）に掲載されていた土方の論に気づかなかった。自作に触れないのが時評の原則だが、東西断絶の一例として、自戒をこめてあえてここに記しておく。今後は幅広い交流のもとに、この重要な問題の検討がさらに進められることを望んでおきたい。

加藤昌嘉「『と』の気脈」（『詞林』40　10月）は、「平安和文における、発話／地／心内の叙法」について、融合しているように見えて実は「割り切り可能」な場合も多いことを述べる。これらが融通

・融合する場合について論じた池田和臣「源氏物語の文体形成」（『国語と国文学』14年2月）は加藤の論にも挙げられているすぐれた旧論だが、両者の視点はかなり異なっている。また、かつて紹介した室城秀之「地券のゆくえ」（『国語と国文学』17年5月）も『落窪物語』の会話文を論じていて、加藤の論に対象が重なる。そしてまた、これらの論の論点は、さきに紹介した土方や井出の論の領域にも連続する。『源氏物語』だけに限らず、平安和文一般についても、なお考えられねばならない問題は多い。

小嶋菜温子「光源氏の元服・結婚」（『源氏物語の始発―桐壺巻論集』竹林舎11月）は、光源氏の元服の儀に「盃酌の唱和歌」がことさらに掲げられていることの意味を問題にしていて興味深い。さきの土方等の論とはまた別種の和歌の姿が、そこでは問われている。

新間一美「雲の『しるし』と『源氏物語』」（『東アジア比較文化研究』5　8月）は、論集『源氏物語の新研究・内なる歴史性を考える』（新典社　17年9月）所収の旧論「算賀の詩歌と源氏物語」をさらに発展させ、山水屏風から『源氏物語』の基本構想の背景にまで及ぶ、スケールの大きな論。昭和30年代に発表された片桐洋一「松にかかれる藤浪の」「松鶴図淵源考」（ともに『古今和歌集の研究』に収録）の流れを汲む、神仙思想の受容と展開に着目する文学研究の、最先端のかたちがここに示されている。

李宇玲「夕霧の学問」（『国語と国文学』12月）は、「数々の異例をよりあわせた」夕霧の字の儀式や放島試について史実を丹念に探り、物語叙述の意味を探った労作。山本一也「更衣所生子としての光源氏」（『国語国文』12月）もまた、更衣の子である光源氏に対する父帝の待遇に注目し、史実との異同を探っている。また、中野方子「身にしたがふ心」（『文芸研究』160　17年9月）は、『紫式部集』の和歌に見える「身」と「心」の関係が仏典に由来することを指摘して有益な論。山本淳子「『権記』所載の一条院出離歌について」（『日本文学』9月）は、一条天皇のいわゆる辞世歌が誰に対して詠まれたものだったかについての行成の理解を、用例調査をふまえて探っている。

『中古文学』（78）には、学会賞受賞論文だけでなく一般論文も掲載されているが、その中で、藤岡忠美「醍醐寺五重塔の落書和歌」は、天暦五年（九五一）以前に記された落書がそのまま残されたという希有の資料をめぐって、書き手としての画工の実態や仲平・伊勢の恋愛などにふれながら当時の和歌生活を考察した、魅力的な論。限られた素材の背後に幅広い世界を見るベテランの力量と情熱には学ぶべきものが多い。舟見一哉「清輔本後撰集証本の性格」（『国語国文』10月）は、異同表記や書き入れが多い承安三年書写本の複雑な形態を丹念に分析して、『後撰集』を未定稿と考えながらも証本を作成せざるを得なかった清輔の思いをそこに読みとっている。最近の伝本研究には、国文学研究資料館のマイクロフィルムによって容易に諸本の影印が入手できるのをよいことに、伝本資料を単なる本文情報として、いわばお手軽に扱った論が多いが、それだけに、舟見の論の、伝本をひとつの生きた作品として読み解こうとする姿勢には共感が持てる。三代集時代の研究は最近手薄だが、その意味でも今後の展開に期待したい。

紙宏行「俊成『古今問答』考」（『和歌文学研究』93　12月）は、これまでほとんど論じられることのなかった『古今問答』の内容を検討し、初期の俊成の古今集注釈説の「古さ」を指摘していて注目される。年が明けて19年1月、完成が待たれていた松野陽一・吉田薫『藤原俊成全歌集』（笠間書院）が刊行された。この方面の研究の充実を祝いたい。

―関西大学教授―